

小山事業所 1 号館エリア生物多様性プロジェクト

[日立ハイテクサイエンスの森] に対する

JHEP 認証 [第 1 回更新]

審査レポート（概要版）

2020 年 12 月



小山事業所 1号館エリア生物多様性プロジェクト
[日立ハイテクサイエンスの森] に対する
JHEP 認証 [第 1 回更新] 審査レポート (概要版)

評価申請者

名称 株式会社日立ハイテク (代表取締役 取締役社長 宮崎 正啓)
住所 東京都港区虎ノ門一丁目 17 番 1 号 虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー

申請番号

1-4214601-1501

評価実施者

名称 公益財団法人日本生態系協会 (会長 池谷 奉文)
住所 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル

ハビタット評価認証制度 JHEP

JHEP（ジェイヘップ）は、米国連邦政府が開発した HEP という環境評価手法を、当協会が日本で適用可能な形に改良し、2008 年に創設したもので、事業を実施する前よりも生物の多様性の価値が向上した取り組みを、定量的に評価、認証する日本唯一の認証制度です。

自然の生態系は現代世代及び将来世代のもっとも大切な生存基盤です。その生態系の構成要素である生物の多様性は、私たちにとって遺伝子資源としても、なくてはならない基本財産です。その生物の多様性の価値がこれまで、漠然としたイメージで取り扱われてきました。

JHEP により、「動物のすみやすさ（HSI）」、「植生の地域らしさ（VEI）」という 2 つの指標を用いて数値化し、事業の前後を比較することで、生物の多様性の保全や再生の効果を明確に示すことが可能となりました。本認証は世界レベルの厳しい基準によるもので、消極的な環境への“配慮”では取得困難です。それだけに、認証を取得した取り組みは、社会に大きく貢献すると共に、世界へ発信可能な事業であると言えます。

目次

I. 評価の概要	1
II. 評価区域と基準年	3
1. 評価区域	3
2. 基準年	4
III. 事業内容	5
1. 事業の概要	5
2. 緑地割合	10
IV. 評価結果	11
1. 保全再生目標等の設定	11
2. 植栽植物等の確認（要件 3 の確認）	18
3. 評価基準値の算出	19
4. 事業によるハビタット得点の算出	24
5. 更新年の 50 年後におけるハビタット得点（要件 2 の確認）	30
6. 評価値（要件 4 の確認）	31
V. 審査結果	53

I. 評価の概要

申請番号 1-4214601-1501

評価対象事業

名称 小山事業所 1号館エリア生物多様性プロジェクト
[日立ハイテクサイエンスの森]
所在地 静岡県駿東郡小山町竹の下 36-1
面積 4.4ha
概要 研究開発施設内の敷地において、既存人工林の広葉樹林化や既存草地の半自然草地化を進めていくことにより、生物多様性の向上を図るプロジェクト

事業実施者

名称 株式会社日立ハイテク（代表取締役 取締役社長 宮崎 正啓）
住所 東京都港区虎ノ門一丁目 17 番 1 号 虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー
問合窓口 CSR 本部 環境推進部
電話番号 03-3504-7111

認証タイプ ハビタット評価認証 ver.3.0（JHEP ver.3.0）

基準年 2013 年

申請年 2015 年

更新年 2020 年

緑化条件 総敷地面積の 20%以上が緑地となる。

将来における緑地割合 85.6%

目標植生 クヌギーコナラ群集／ヤマツツジーアカマツ群集／
アズマネザサーススキ群集

評価種 ニホンリス／コゲラ／シジュウカラ／コムスジ／ジャノメチョウ

評価結果

要件 2 ハビタット得点が将来までに 8 点以上となることが見込まれる。

50 年後のハビタット得点	63.4 点 (得点範囲：0～100 点)
（内訳）樹林	60.3 点
草地	3.1 点

要件3 生態系被害防止外来種・未判定外来生物を使用しない。
使用なし

要件4 評価対象事業で得られる、更新年から50年間における年平均ハビタット
得点が、評価基準値以上となる。
年平均ハビタット得点の増減 +14.5点(得点範囲:-100~+100点)

認証可否 認証可

保全タイプ ハビタット維持保全および向上

評価ランク AAA

総評

今回の更新認証では、一部区域での樹木の生育状況に課題もありましたが、樹木は全体として計画通りに育成されていることが確認され、評価値は、+14.5点(得点範囲:-100~+100点)と初回認証時からさらに向上しました。

国際的にESG経営やSDGsが求められる時代をむかえ、持続可能な経済・社会の実現に向け、企業の果たすべき役割が、今ほど注目されている時代はありません。今後取組みが持続、拡大され、地域の生態系ネットワークの拠点となっていくことが期待されます。

ガイドライン

ハビタット評価認証制度 考え方と基準 ver.3.0

評価認証機関

公益財団法人日本生態系協会

電話番号 03-5951-0244

認証日 2015年12月7日

更新日 2020年12月7日

有効期限 2025年12月6日

認証番号 1-4214601-1501/01

Ⅱ. 評価区域と基準年

1. 評価区域

評価区域は静岡県駿東郡小山町竹の下 36-1 に位置し、面積は 4.4ha である（下図の赤枠内）。

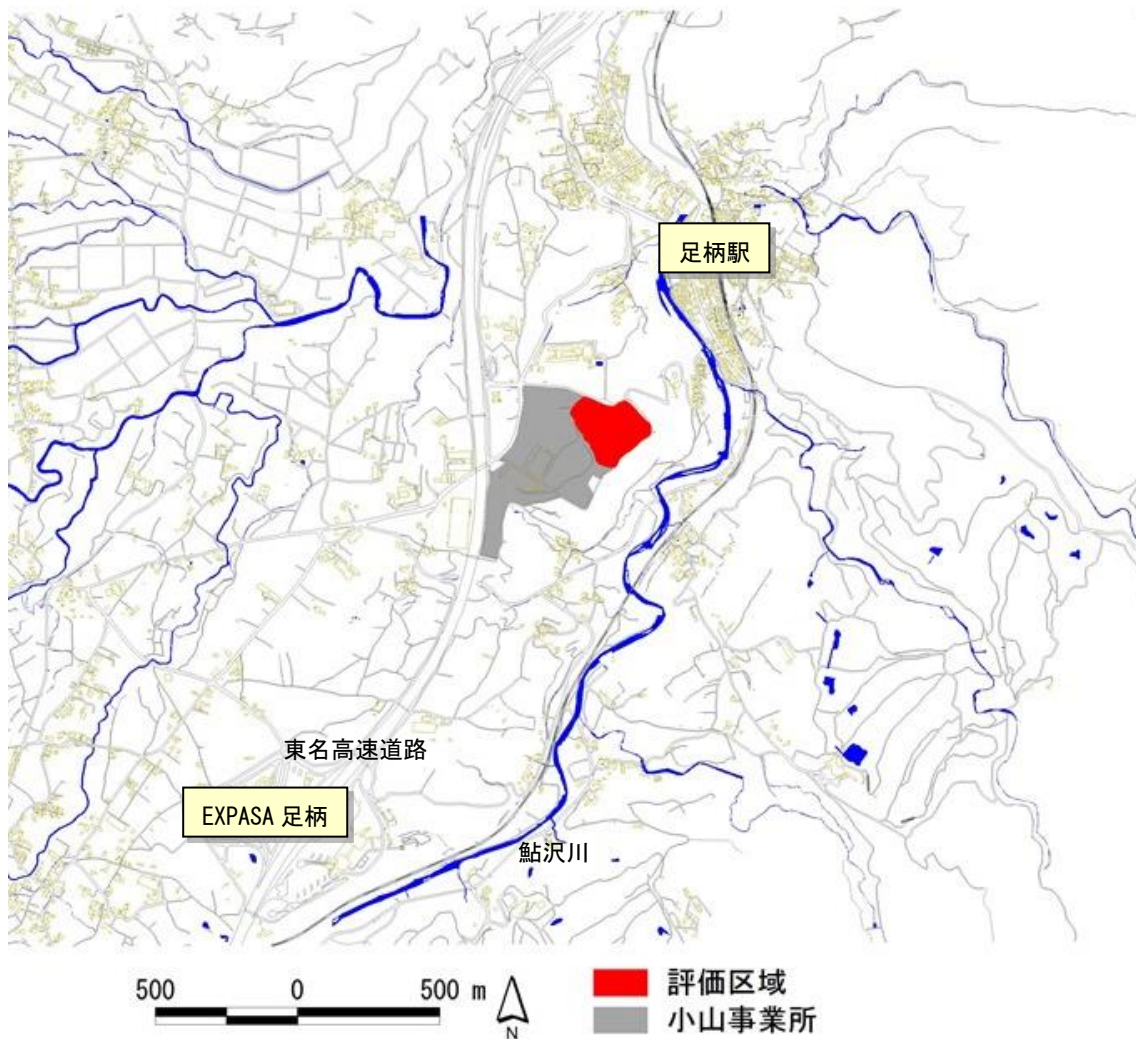


図. 評価区域

(国土地理院 (2015) 発行の基盤地図情報 25000 (地図画像) をもとに作成)

2.基準年

基準年は、土地取得年である 2013 年とする。

Ⅲ. 事業内容

1. 事業の概要

対象地は、富士山から東へ約 20km、JR 足柄駅付近に位置している。2013 年に株式会社日立ハイテク（当時：株式会社日立ハイテクノロジーズ）が土地を所有する以前から、研究開発施設として利用されてきた。株式会社日立ハイテクにより同施設が取得された後も「小山事業所」として同じ用途で使われてきたが、2015 年度から順次、敷地内の 1 号館を中心とした保全エリア [日立ハイテクサイエンスの森] において生物多様性の向上に向けた取り組みが実施されている。

対象地の大部分を占めるスギ・ヒノキの人工林については、段階的に小面積皆伐（パッチ・カッティング）が実施され、環境意識の向上を兼ねた、一般社員と地域住民による植樹祭を通じ、同敷地内に生育している地域在来の植物を活用した広葉樹林化が進められている。また、1 号館のまわりに残るアカマツ林については、今後も適切に維持管理が行われていく予定である。

対象地西側の草原についてはゾーニングを行った上で、多様な在来の野草の広がる半自然草地へと転換されていく計画であり、具体的には、刈取り圧・頻度の調整やススキの株移植等が行われている。

また、敷地内の各所で見られるセイタカアワダチソウやハルジオン等の外来植物の駆除も、継続的に取り組まれている。

名称	小山事業所 1 号館エリア生物多様性プロジェクト [日立ハイテクサイエンスの森]
敷地面積	4.4ha
用途	研究開発施設、および、環境保全林・草地
着手	2015 年度
完了	2022 年度目処（その後も継続して取り組んでいく予定）



図. 上空から見た「日立ハイテクサイエンスの森」



図. 一部エリアのスギ・ヒノキ人工林は、広葉樹林へと転換が進められている



図. ススキを中心に多様な在来の野草から成る半自然草地



図. 敷地内に設置された、取組みを紹介する看板

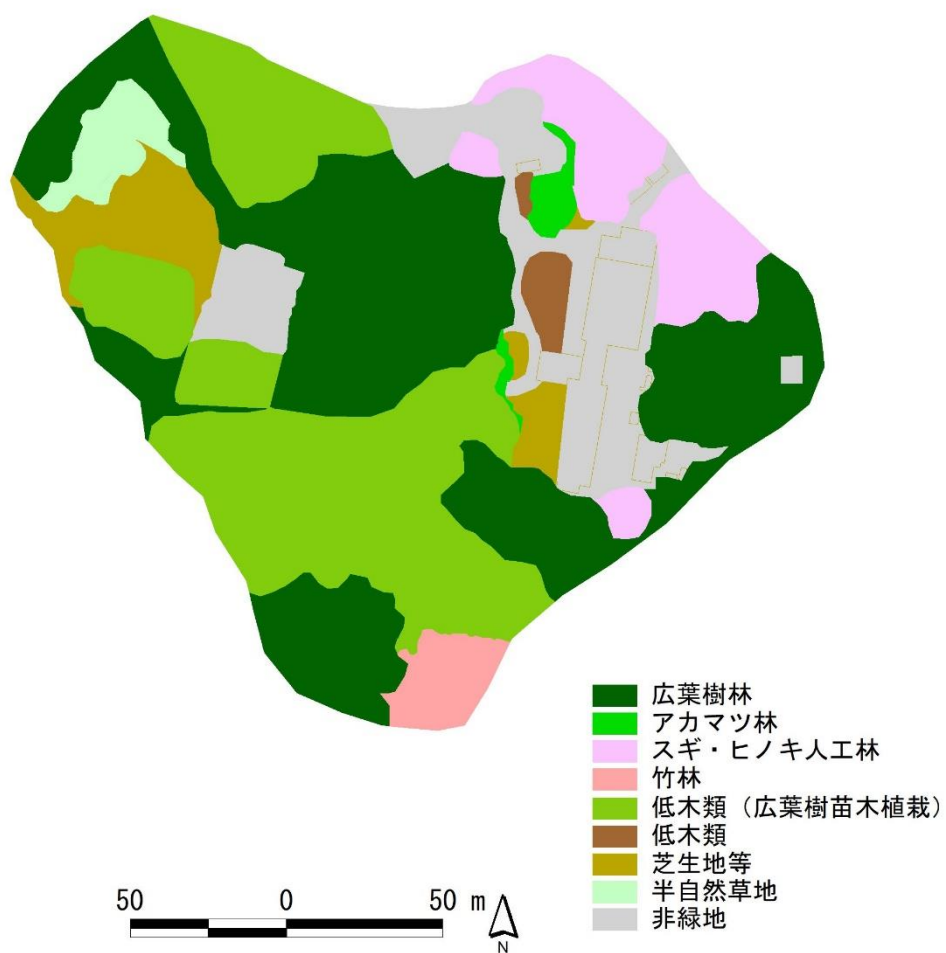


図. 2020年における植生等の分布

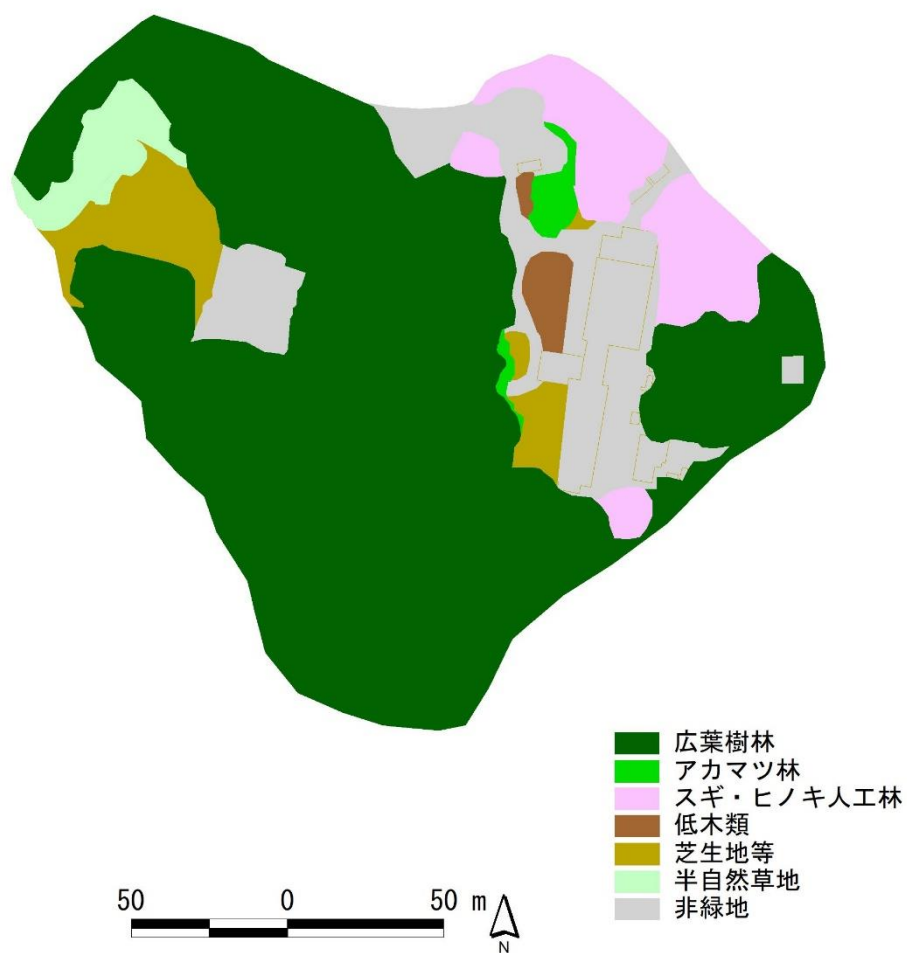


図. 2070年における植生等の分布予測

2.緑地割合

JHEP の定義に従った当該評価区域の緑地割合は 85.6%であり、JHEP 認証に関する緑化条件は満たされている。

IV. 評価結果

1. 保全再生目標等の設定

1-1. 保全再生目標

植生については、評価対象地において成立しうる自然植生の系列に基づいた在来の植生の保全・再生を目標とする。動物に関しては、評価区域の立地条件および設定された目標植生に生息し、希少性や固有性、栄養段階などの高い種や人為影響を受けやすい種などを中心として保全を図ることを目標とする。

1-2. 基準年から過去 30 年間の状況

基準年（2013 年）から過去 30 年間（1983 年～2013 年）のハビタットの状況を、複数年代の空中写真を用いて把握した。

判読の結果、1983 年、1988 年および 1999 年時点では主に針広混交林が広がり、一部に建物とその外構（1974 年竣工）、草地・裸地が確認された。2012 年時点では裸地がほぼ見られず、樹林面積も過去最大となった。

以上より、基準年から過去 30 年間では、基準年が最も植生の成熟した状態にあったと推察された。従って、目標植生は、基準年の遷移段階に従って設定することとした。

1-3.環境タイプの分布状況

JHEP では「環境タイプ」という概念を設けている。環境タイプは、ランクの高い順に「1. 湿性環境、樹林」－「2. 低木・草地・竹林」－「3. 人工地」と定義している。対象地内を環境タイプで区分し、単位区画ごとに、原則として基準年以前の30年間と初回申請年以前の30年間が重なる期間（環境タイプ設定期間）における環境タイプの変遷を確認する。その期間で最も高いランクの環境タイプを、その単位区画における基準年以前の環境タイプとしている。

1-2 における空中写真判読の結果、1983年から2013年では、環境タイプ1から3までのタイプが確認された。基準年以前で最も高い環境タイプの面積割合は、樹林タイプが77.6%、低木・草地・竹林タイプが14.4%、人工地タイプが8.0%であった。

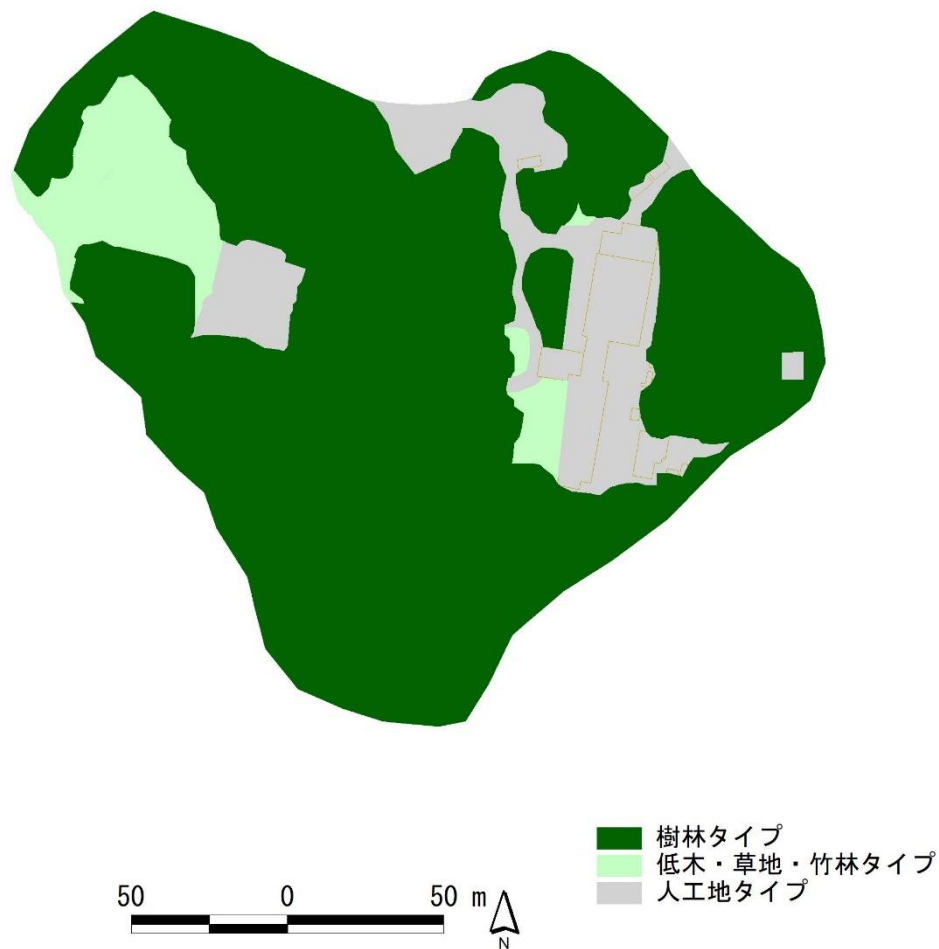


図. 基準年以前における環境タイプの分布

1-4. 自然植生の遷移系列

対象地を含む当該地域の地形や気候条件から、自然植生に至る遷移系列について整理した。

小山町は東西に伸びており、西側は富士山を頂点とした富士外輪状の三国山系、北東側は丹沢山地、東南側は箱根外輪山に囲まれた地形となっている。全般的には太平洋側気候に区分されるが、標高が高いため若干冷涼な地域となっている。

対象地は小山町の東側に位置しており、水源を箱根山麓に発する二級河川の鮎沢川水系、標高 415m 前後に位置している。

中部地方のこうした条件下における自然植生は、シキミーモミ群集と判断される（宮脇（編）1984*、宮脇ら 1977†）。シキミーモミ群集は、ヤブツバキクラス域上部の山地に成立する常緑針葉樹と常緑広葉樹の混交林である。

当該地域におけるシキミーモミ群集の代償植生としては、クヌギーコナラ群集およびヤマツツジーアカマツ群集が考えられる（宮脇ら 1977、鈴木 2001‡）。クヌギーコナラ群集は、コナラやクヌギを主体とした落葉広葉樹の二次林である。また、ヤマツツジーアカマツ群集は、アカマツを主体とした常緑針葉樹の二次林である。

先駆的二次林としては、クサギーアカメガシワ群団が考えられる。

二次草原としては、チガヤ群落とアズマネザサーススキ群集が成立する。チガヤ群落はチガヤを主な構成種とし、上記樹林タイプの成立する環境下で、定期的な刈り込みや火入れといった人為的攪乱により、樹林化が妨げられている場合に成立する。攪乱強度の低下に伴って、ススキが優占するアズマネザサーススキ群集へと移行する。

* 宮脇昭（編）（1984）日本植生誌 6 中部．至文堂，東京．

† 宮脇昭・奥田重俊・原田洋・中村幸人（1977）中部圏（東海地方）の潜在自然植生．横浜国立大学環境科学研究センター第 3 巻第 1 号：77-108

‡ 鈴木伸一（2001）日本におけるコナラ林の群落体系．植生学会誌 18：61-74.

以上を次表に整理した。

表. 自然植生に至る遷移系列の推定

遷移段階	群集名	環境タイプ
極相林	シキミーモミ群集	樹林タイプ
二次林	クヌギーコナラ群集 ヤマツツジアカマツ群集	
先駆的二次林	クサギーアカメガシワ群団	低木・草地・竹林タイプ
二次草原	アズマネザサーススキ群集 チガヤ群落	

1-5.目標植生

環境タイプの分析より、本事業において目標とする植物群集と面積は、樹林タイプとしてクヌギーコナラ群集を 3.35ha、ヤマツツジアカマツ群集を 0.05ha、低木・草地・竹林タイプとしてアズマネザサーススキ群集を 0.35ha と設定した。残りは、建物や駐車場などの非緑地である。

目標植生の分布を下図に示した。

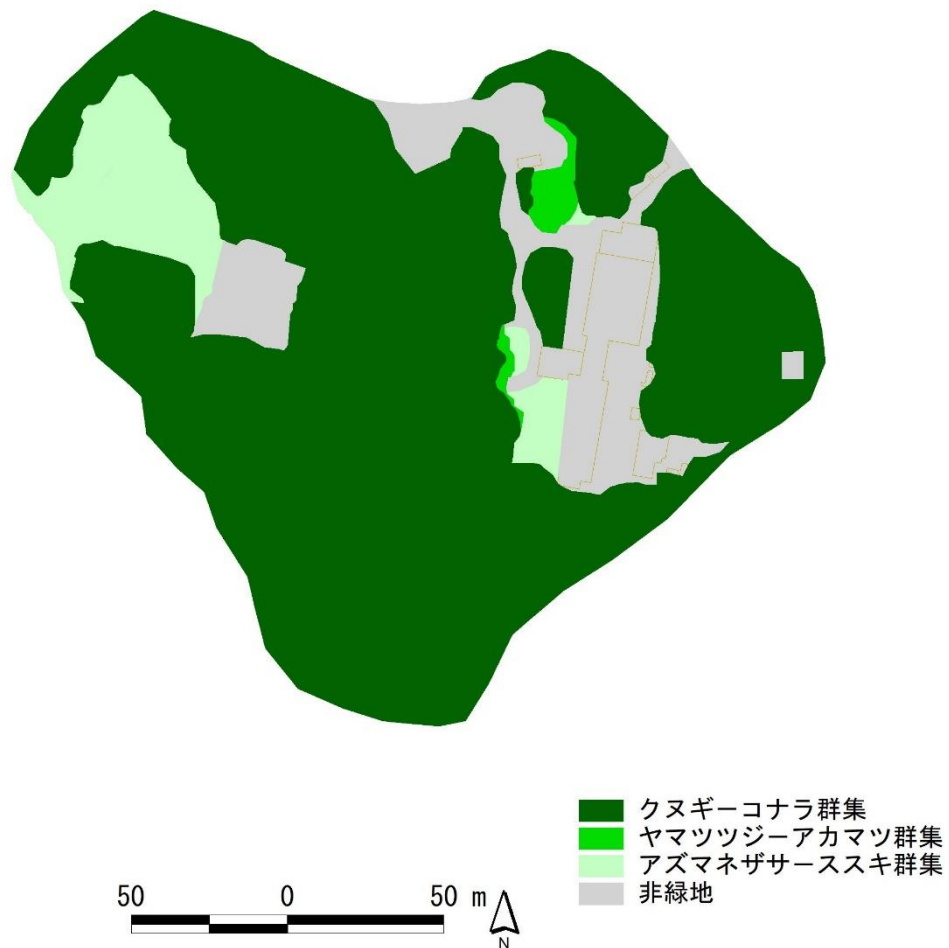


図. VEI 算出のための目標植生の配置状況
(緑地として維持保全していく区域のみを表示)

基準年以前と事業計画および設定された目標のそれぞれにおける環境タイプの面積割合を下図に示した。

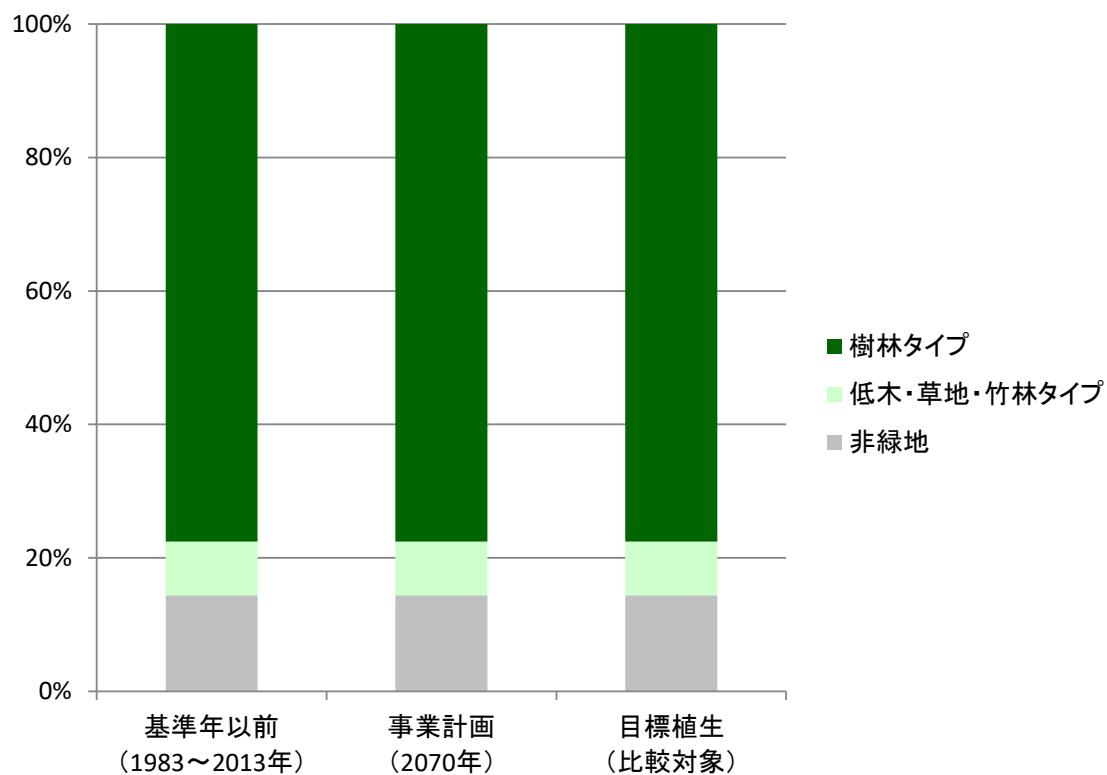


図. 環境タイプの面積割合

1-6. 評価種の選定

(1) 選定プロセス

評価種は、樹林タイプについてはクヌギ・コナラ群集およびヤマツツジーアカマツ群集に生息する種を含む分類群の中から、低木・草地・竹林タイプについてはアズマネザサ・ササキ群集に生息する種を含む分類群の中から、それぞれ選定することとした。また、効率的に分析を進めるため、HSI モデルがすでに開発されている種、または十分な生態情報が存在する種を対象とした。その結果、哺乳類と鳥類、昆虫類（チョウ類）から選定することとなった。

本事業の規模は約 4ha であり、対応する行動圏クラスは 1～4 となる。哺乳類、鳥類、昆虫類（チョウ類）それぞれの中から、行動圏クラスを参考に動物種を選定した。

(2) 選定結果

樹林の評価種としては、哺乳類のニホンリス、鳥類のコゲラ、シジュウカラ、昆虫類（チョウ類）のコミスジが選定された。草地の評価種としては、昆虫類（チョウ類）のジャノメチョウが選定された。

2.植栽植物等の確認（要件3の確認）

本事業において、審査を実施した時点における生態系被害防止外来種リストに掲載されている生物、および未判定外来生物との照合を行い、問題がないことを確認した。

3.評価基準値の算出

3-1.方法

評価基準値は、基準年（2013年）から過去30年間における状況に基づいて設定される。1-2で確認したとおり、基準年から過去30年の間では、基準年が最も植生の成熟した状態であると推察され、VEI（植生評価指数、植生の地域らしさ）と各評価種 HSI（ハビタット評価指数、動物評価種のすみやすさ）についても、最も高い状況にあると考えられる。このため、評価基準値は、基準年の時点におけるハビタット得点を50年間累積して求めた値を採用した。基準年におけるVEIおよびHSIは、以下のように推定した。

(1) VEI

2015年に現地踏査を行い、植物社会学的観点から同質と思われる相観植生に区分し、植生データを作成した。相観植生ごとに植物社会学的方法にもとづく植生調査を行った。VEIの算出手順に従って、植生データをVEIに変換した（植生が存在しない区域のVEIは0点とした）。

(2) HSI

3-1(1)で区分した相観植生について、2015年に動物評価種のハビタット調査を行った。アカマツや立枯木の本数密度、階層別の被度などを現地で空中写真にマッピングし、得られたデータをGIS上に図化した。

これをもとに評価区域全体でのハビタット変数を算出した。ハビタット変数をHSIモデルに代入し、HSIを求めた。得られたHSIを該当する環境タイプ（樹林タイプまたは草地タイプ）の面積比率で割った値を「環境タイプ内のHSI (HSI_{hab})」とした。HSI_{hab}に100を乗じた値を「環境タイプ内のハビタット得点 (HS_{hab})」とし、HS_{hab}に該当する環境タイプの面積比率を乗じたものを「ハビタット得点 (HS)」とした。

3-2.結果

評価種および植生ごとに、基準年（2013 年）におけるハビタット得点を 50 年間延長したものを下図に示した。

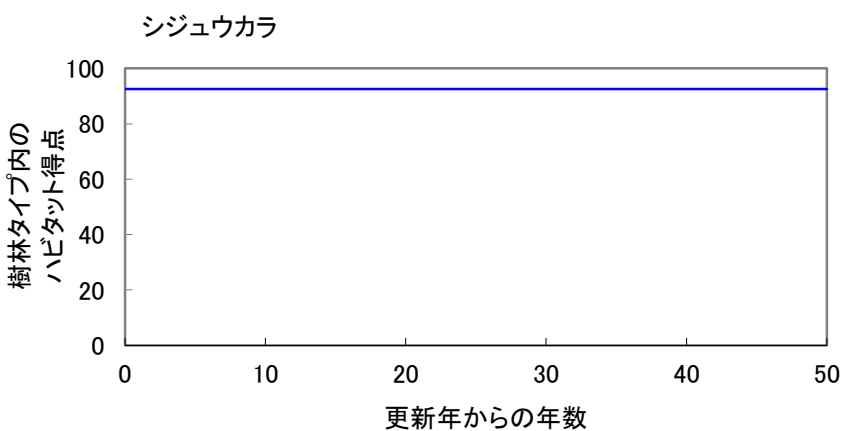
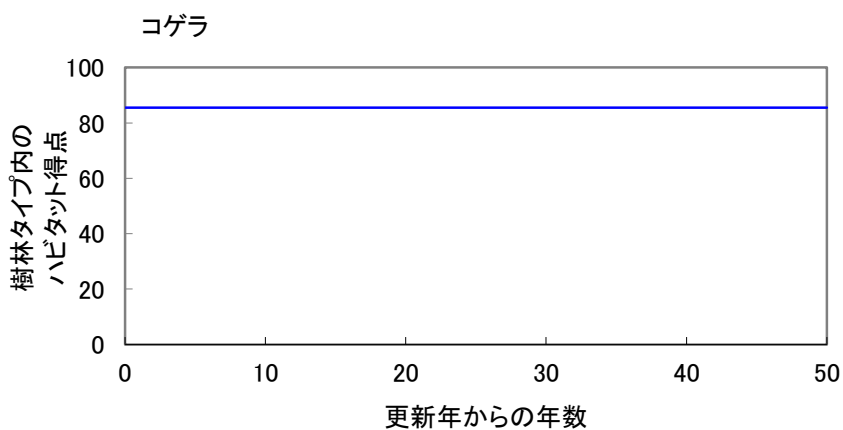
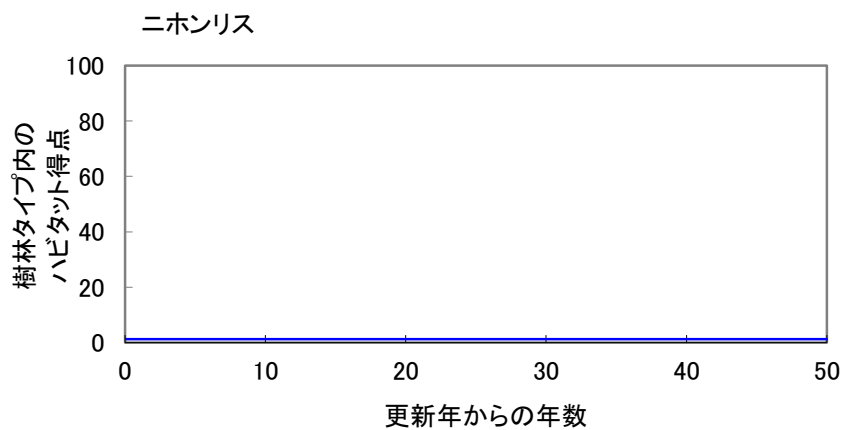


図. 評価種ごとの評価基準値

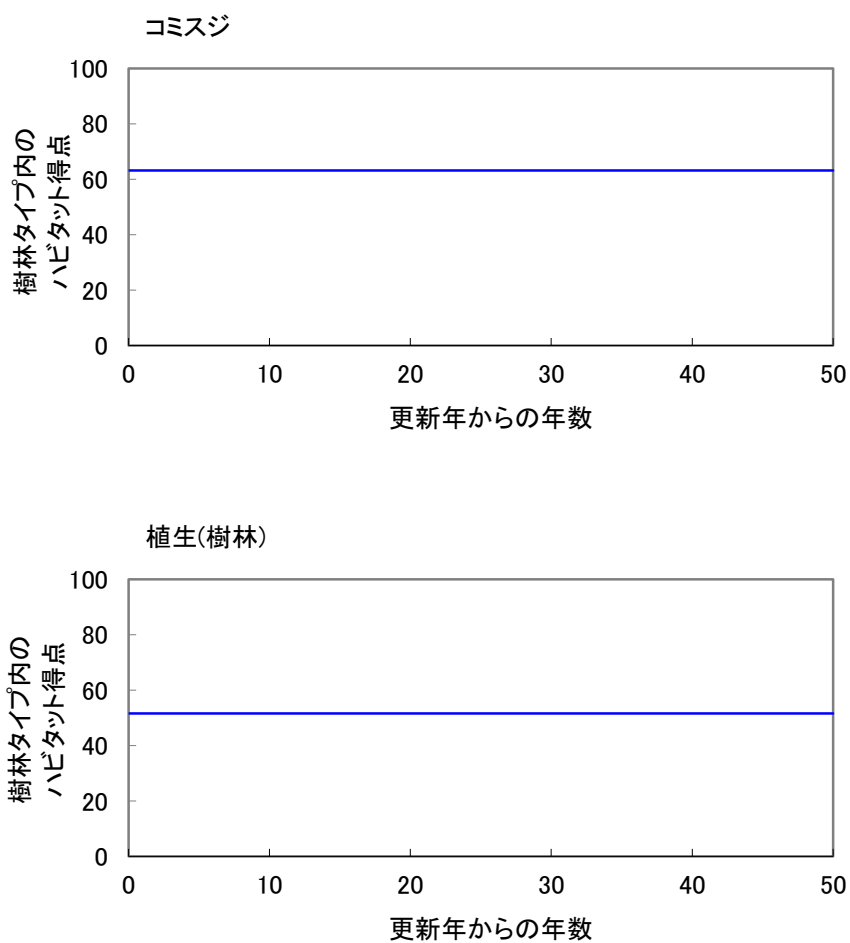


図. 評価種および植生ごとの評価基準値

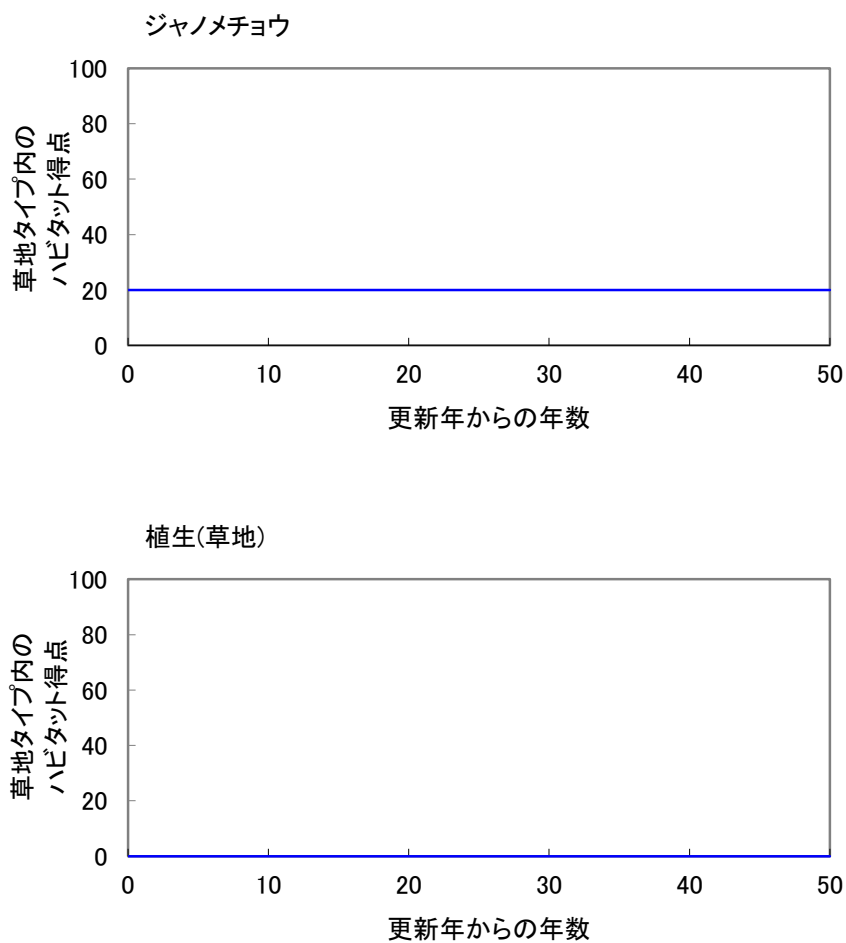


図. 評価種および植生ごとの評価基準値

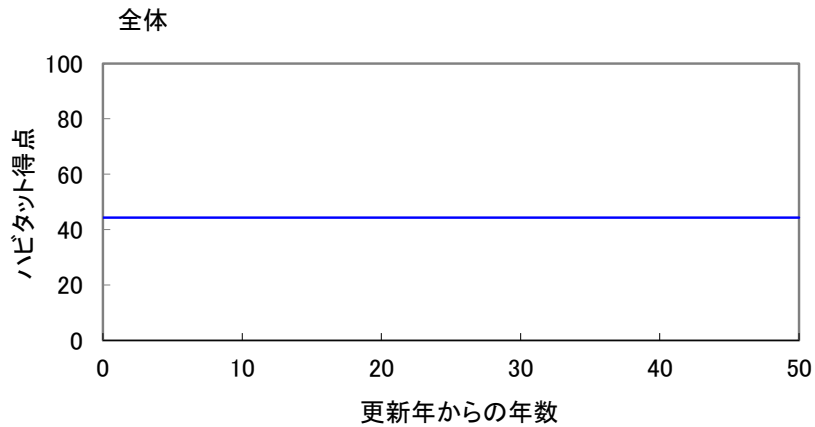


図. 全体での評価基準値

評価基準値を下表に示した。

表. 評価基準値

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内の 年平均ハビタット得点	年平均 ハビタット得点*	重み
樹林	0.776	動物	ニホンリス	1.3	1.0	1.33
			コゲラ	85.6	66.4	1.00
			シジュウカラ	92.5	71.8	1.00
			コムスジ	63.2	49.0	1.00
			動物加重平均** F1	56.1	43.5	
			植生 F2	51.5	39.9	
		樹林の平均 F = (F1+F2)/2	53.8	41.7		
草地	0.080	動物	ジャノメチヨウ G1	20.0	1.6	1.00
			植生 G2	0.0	0.0	
			草地の平均 G = (G1+G2)/2	10.0	0.8	
非緑地	0.144			0.0	0.0	
全体					42.5	

* 環境タイプ内の年平均ハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

** 評価種の行動圏クラスに応じて、それぞれのハビタット得点に重みを付けて加重平均した値

4.事業によるハビタット得点の算出

4-1.方法

小山事業所 1 号館エリア [日立ハイテクサイエンスの森] では、2015 年度から順次、既存人工林の広葉樹林化や既存草地の半自然草地化など、生物多様性の向上に向けた取り組みが実施されている。

既存人工林の広葉樹林化による針広混交林への誘導

【実施済】

- ・ 2016 年度から 2018 年度にかけて、スギ・ヒノキ人工林の段階的な小面積皆伐（パッチ・カッティング）が実施された。（面積 1.3ha）
- ・ 敷地内に生育している地域在来の植物から種子の採取・育苗が実施され、育成された苗木は皆伐したエリアへと植樹された。
- ・ 循環型社会への貢献を目指し、伐採木の一部は、コースター等の作成に利活用された。

【継続・実施予定】

- ・ 植樹された苗木は引き続き育成し、今後も広葉樹林化が進められていく。
- ・ 基本的に広葉樹に対する成長制限は設けず、自然の遷移に任せて管理していく方針。
- ・ 残りの伐採木は引き続き、ウッドチップ等に敷地内で有効利用される予定。
- ・ 2020 年度に確認された竹林は 2025 年度までを目途に、伐採から広葉樹林化が進められていく予定。

既存のアカマツ林

【継続】

- ・ 小山事業所 1 号館のまわりに残るアカマツ林については、今後も適切な維持管理が行われていく。

既存草地の半自然草地化

【実施済】

- ・ 生物多様性の向上を目指した植生管理ゾーンであること周知する、解説板が設置されている。
- ・ ゾーニングを行った上で、芝生地から様々な在来の野草の広がる半自然草地へと転換されていく計画であり、2020 年現在、面積 0.10ha が完了している。

【継続・実施予定】

- ・ 半自然草地へと転換は引き続き実施され、2022年度までを目処に、残り面積0.03haのススキの株移植等が実施される予定。
- ・ 刈取り圧・頻度の調整による粗放的な管理体制へと移行し、1～2m程度の草丈が維持されていく。

外来植物対策

【継続】

- ・ 敷地内の各所で見られる外来植物（セイタカアワダチソウやハルジオン等）の駆除は、今後も継続的に取り組まれていく。

各相観植生の群落高および被度は、樹木の成長モデルから予測した。その結果、広葉樹林化を進める区域は、2047年（更新年の27年後）に成長の転換点を経て、2070年（更新年の50年後）においても遷移の途中段階にあると推察された。

また、半自然草地化を進める区域は、2022年（更新年の2年後）に計算上想定している最高得点に至ると予測された。

以上より、VEIおよびHSIは、2020年（更新年）、2022年（更新年の2年後）、2047年（更新年の27年後）、2070年（更新年の50年後）の4時点を算出した。

(1) VEI

2020年に行った植生調査の結果を元に、VEIの算出手順に従ってVEIを求めた。得られたVEIを将来における各相観植生へと当てはめて、これを属性値とした。植生が存在しない区域のVEIは0点とした。

(2) HSI

2020年に行った動物評価種のハビタット調査の結果および当協会が独自に取得したデータを参考に、各相観植生について、階層別の被度、アカマツや立枯木の本数密度、階層別の被度などのハビタット変数を予測した。HC1層とHC2層については、葉間の間隙を考慮し、80%を最大値とした。HC3層とHC4層については、主に低木や草本が生育する層と考えられるため、100%を最大値とした。

4-2.結果

得られた HSI と VEI に 100 を乗じて、各時期におけるハビタット得点を求めた。その推移を下図に示した。

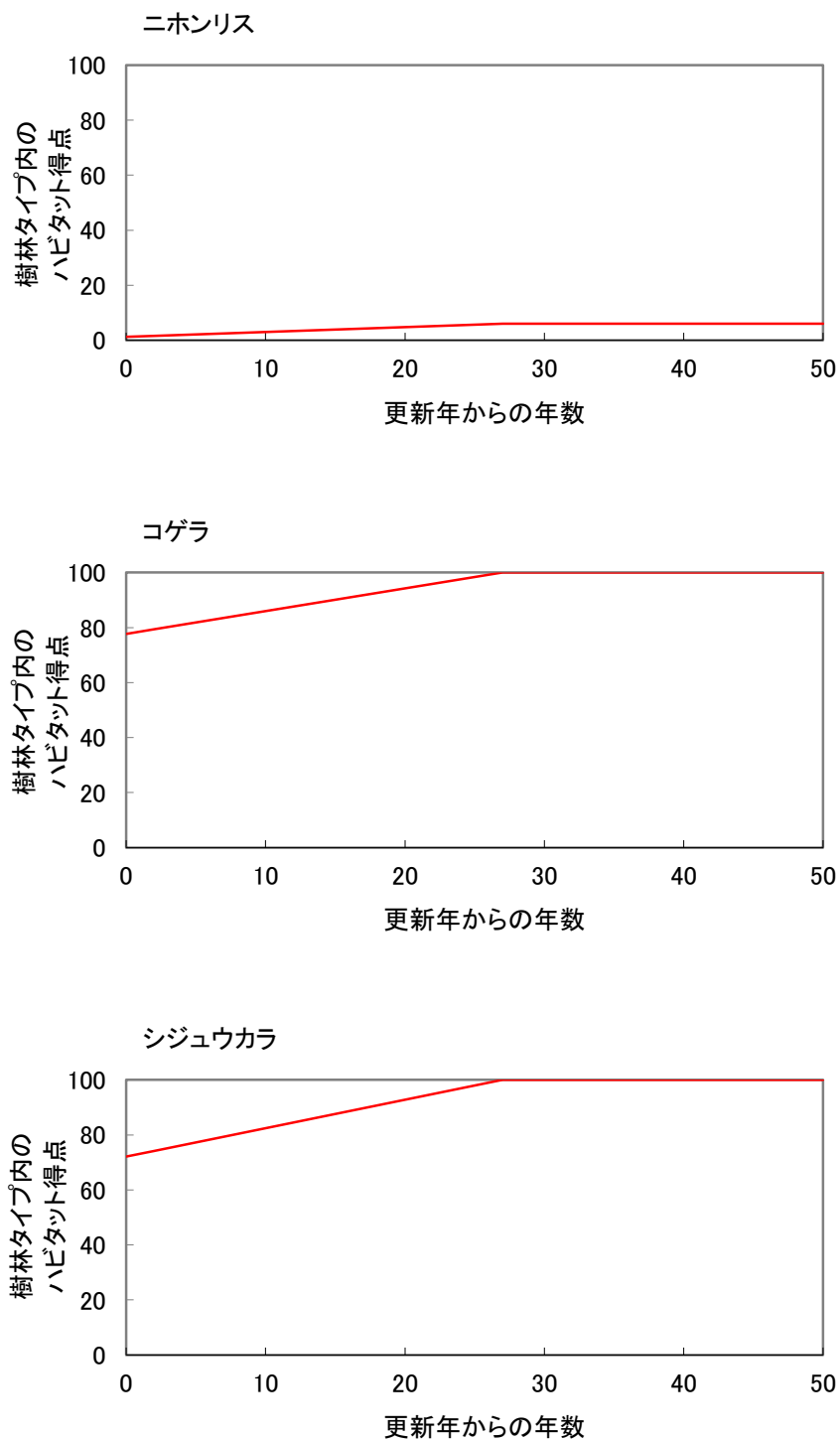


図. 事業により得られる評価種ごとのハビタット得点の推移

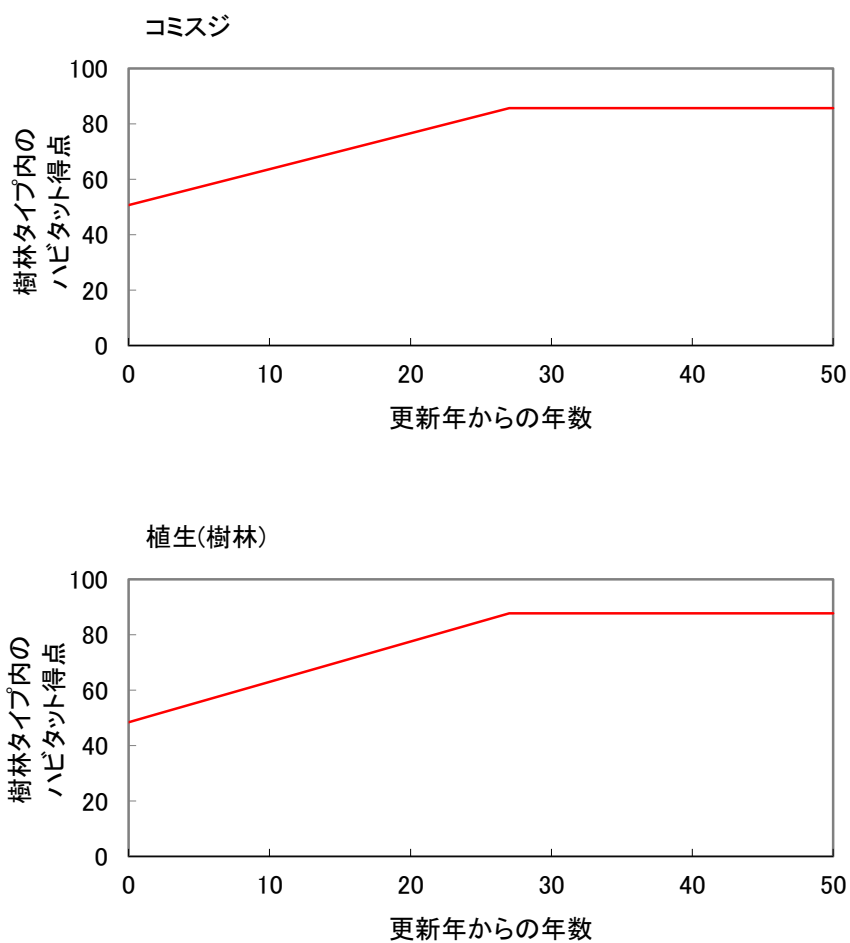


図. 事業により得られる評価種および植生ごとのハビタット得点の推移

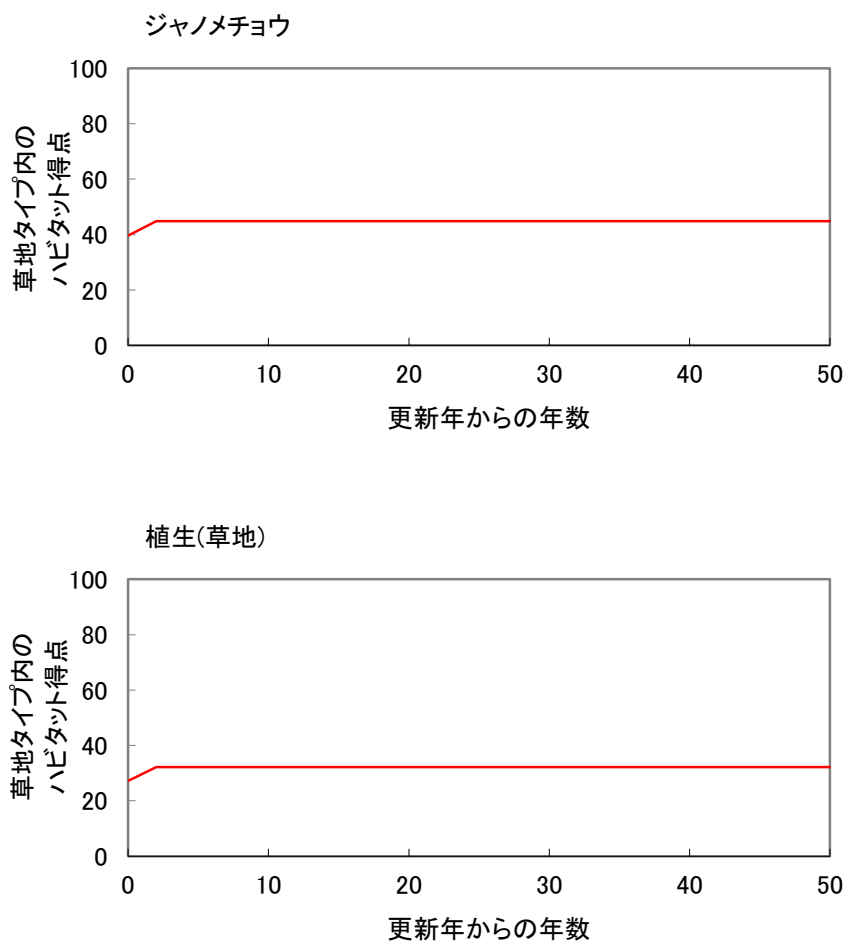


図. 事業により得られる評価種および植生ごとのハビタット得点の推移

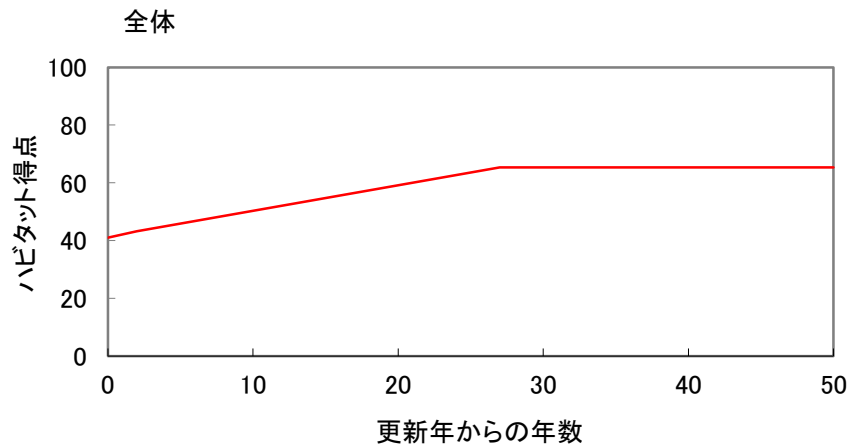


図. 事業により得られる全体でのハビタット得点の推移

本事業により得られると予想された年平均ハビタット得点を下表に示した。

表. 事業により得られる年平均ハビタット得点

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内の 年平均ハビタット得点	年平均 ハビタット得点*	重み	
樹林	0.776	動物	ニホンリス	4.8	3.7	1.33	
			コゲラ	94.0	72.9	1.00	
			シジュウカラ	92.5	71.7	1.00	
			コムスジ	76.2	59.1	1.00	
		動物加重平均** F1			62.1	48.2	
		植生 F2		77.0	59.7		
樹林の平均 $F = (F1+F2)/2$				69.6	54.0		
草地	0.080	動物	ジャノメチョウ G1	44.7	3.6	1.00	
		植生 G2	32.0	2.6			
		草地の平均 $G = (G1+G2)/2$		38.4	3.1		
非緑地	0.144			0.0	0.0		
全体					57.1		

* 環境タイプ内の年平均ハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

** 評価種の行動圏クラスに応じて、それぞれのハビタット得点に重みを付けて加重平均した値

5.更新年の50年後におけるハビタット得点（要件2の確認）

更新年（2020年）の50年後におけるHSIとVEIに100を乗じて、各評価種と植生のハビタット得点を求め、下表に整理した。

表. 50年後のハビタット得点

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内のハビタット得点	ハビタット得点*	重み
樹林	0.776	動物	ニホンリス	6.1	4.7	1.33
			コゲラ	100.0	77.6	1.00
			シジュウカラ	100.0	77.6	1.00
			コムシジ	85.6	66.4	1.00
			動物加重平均** F1	67.8	52.6	
			植生 F2	87.6	68.0	
		樹林の平均 F = (F1+F2)/2	77.7	60.3		
草地	0.080	動物	ジャノメチヨウ G1	44.8	3.6	1.00
		植生 G2	32.1	2.6		
		草地の平均 G = (G1+G2)/2	38.5	3.1		
非緑地	0.144			0.0	0.0	
全体					63.4	

* 環境タイプ内のハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

** 評価種の行動圏クラスに応じて、それぞれのハビタット得点に重みを付けて加重平均した値

6.評価値（要件4の確認）

4で求めた事業により得られる年平均ハビタット得点から、3で求めた評価基準値を引くと、評価値は以下の通りとなった。

表. 評価結果

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	評価値*
樹林	0.776	動物	ニホンリス	+2.7
			コゲラ	+6.5
			シジュウカラ	-0.0
			コムスジ	+10.1
		動物平均 F1	+4.7	
		植生 F2	+19.8	
		樹林の平均 F = (F1+F2)/2		+12.2
草地	0.080	動物	ジャノメチヨウ G1	+2.0
		植生 G2	+2.6	
		草地の平均 G = (G1+G2)/2		+2.3
非緑地	0.144			0.0
全体				+14.5

* 事業により得られる年平均ハビタット得点から評価基準値を引いた値

評価種および植生ごとに、評価基準値（青色）とハビタット得点（赤線）の推移を下图に示した。

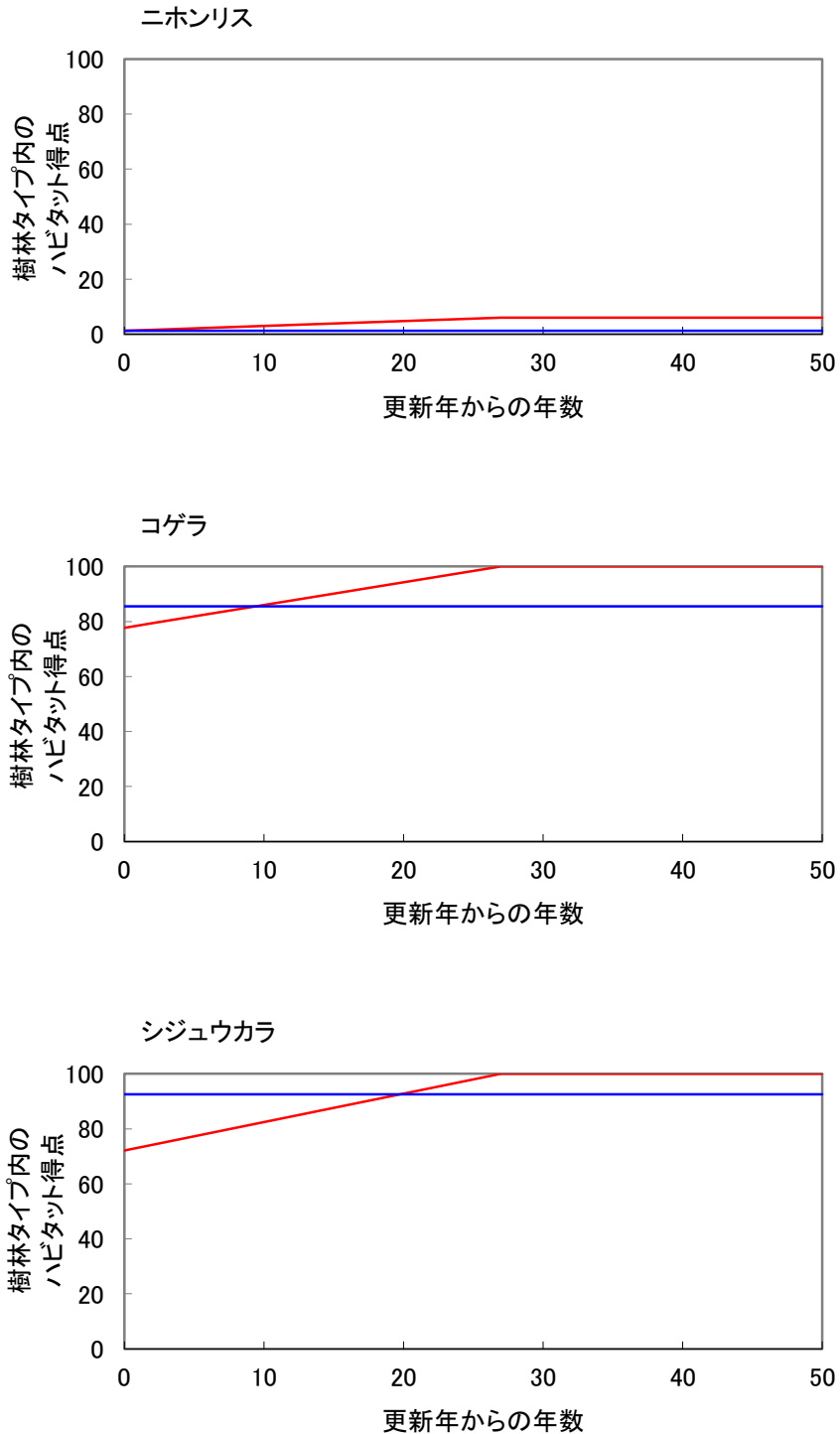


図. 評価種ごとの評価基準値とハビタット得点の推移

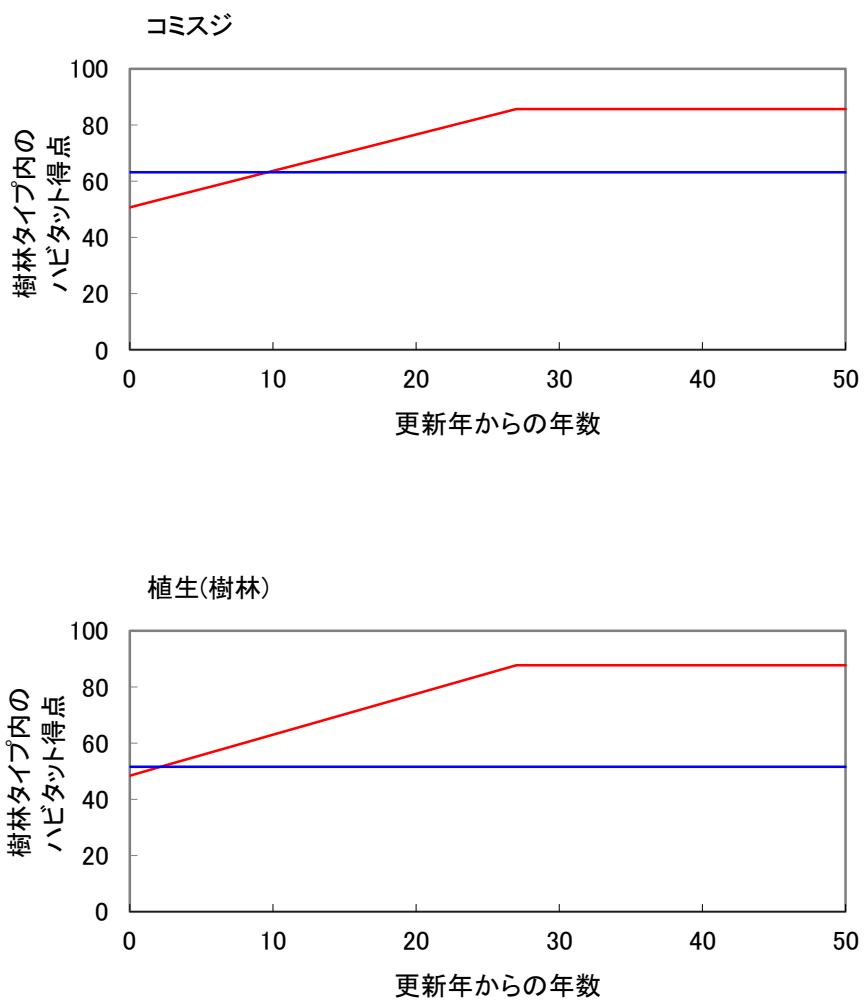


図. 評価種および植生ごとの評価基準値とハビタット得点の推移

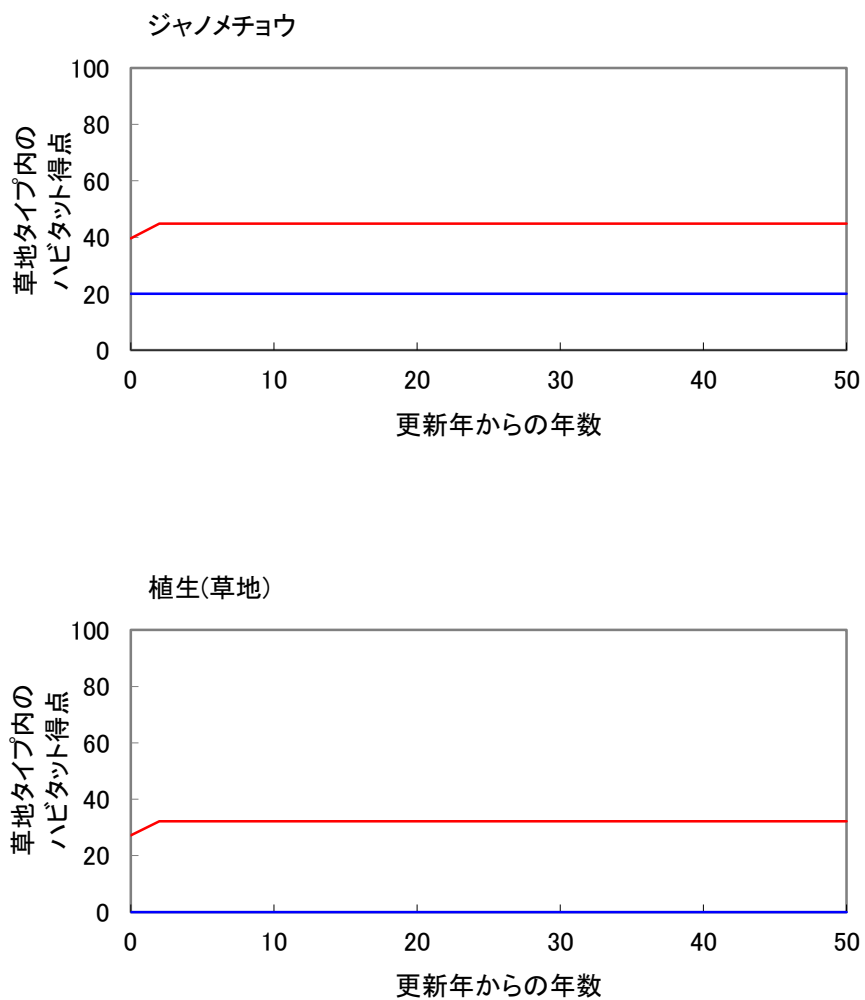


図. 評価種および植生ごとの評価基準値とハビタット得点の推移

全体における評価基準値（青線）とハビタット得点（赤線）の推移を下図に示した。

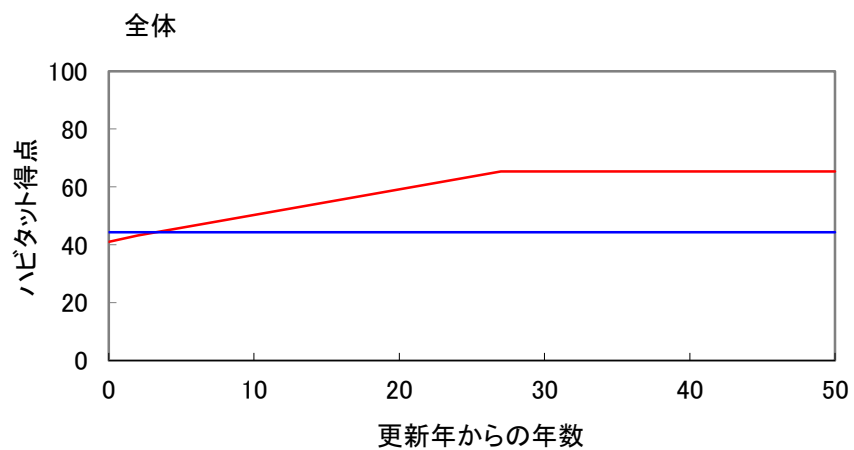


図. 全体の評価基準値とハビタット得点の推移

V. 審査結果

IV章の結果に従い、認証要件ごとの結果を以下に整理する。

要件 2 (ハビタットの質要件)

ハビタット得点が将来までに 8 点以上となることが見込まれる。なお、条件によっては、他のサイトにおいて得られた評価値の一部またはすべてを、評価対象事業に移転すること（オフサイト代償）で、本要件を満たすことも可能である。

更新年（2020 年）の 50 年後におけるハビタット得点は 63.4 点と予測された。このため、本事業は要件 2 を満たすものと認める。

要件 3 (外来種要件)

生態系被害防止外来種・未判定外来生物を使用しない。

本事業において、審査を実施した時点における生態系被害防止外来種リストに掲載されている生物、および未判定外来生物との照合を行い、問題がないことを確認した。このため、本事業は要件 3 を満たすものと認める。

要件 4 (更新要件)

評価対象事業で得られる、更新年から 50 年間ににおける年平均ハビタット得点が、評価基準値以上となる。なお、ここで得られた年平均ハビタット得点を前回認証時の年平均ハビタット得点から引いた値は 10 以下である必要がある。

本事業において、更新年から 50 年間ににおける年平均ハビタット得点は、評価基準値を 14.5 点上回った。また、本事業により得られる年平均ハビタット得点 57.1 点を前回認証時の年平均ハビタット得点 54.4 点から引いた値は 10 以下となった。このため、本事業は要件 4 を満たすものと認める。

認証の可否と認証種別および評価ランク

以上より、本申請事業は認証要件をすべてクリアし、JHEP 認証事業に該当することを認める。保全タイプと評価ランクは以下の通りである。

認証可否 認証可

保全タイプ ハビタット維持保全および向上

評価ランク AAA

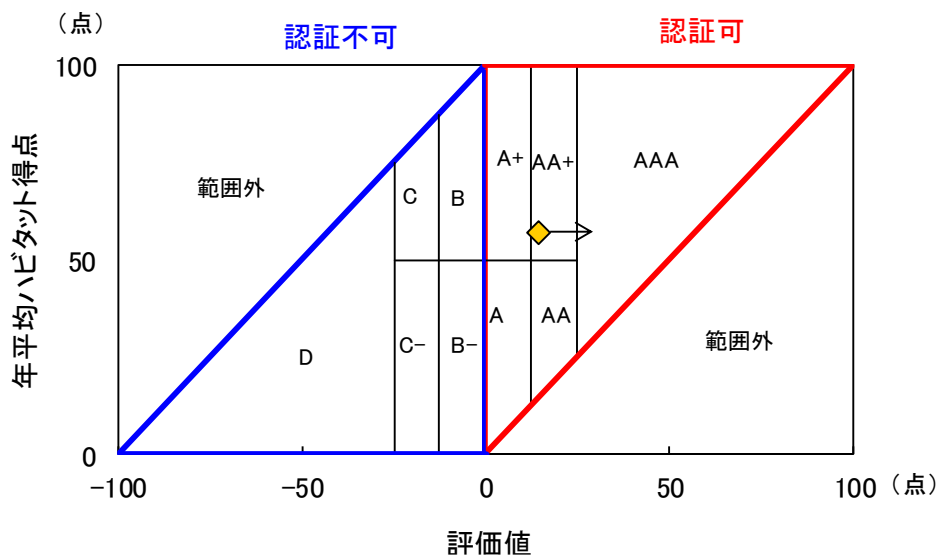
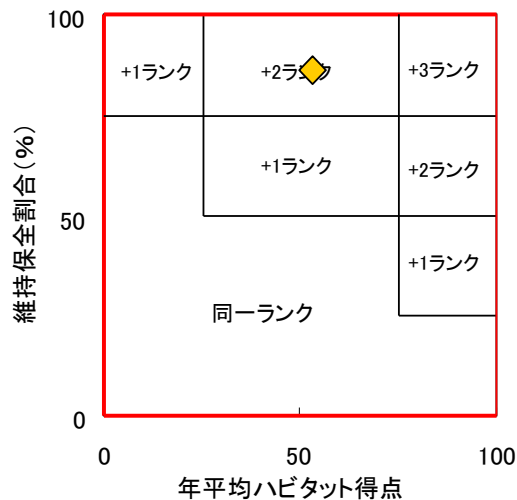


図. 本事業の評価ランク

※本事業は、横軸（評価値）が+14.5点、縦軸（年平均ハビタット得点）が57.1点となる座標に位置する（図の黄色◇）。このため、評価ランクはAA+に相当する。しかし、本評価区域は、その75%以上が樹林または草地として維持保全されるため、下図に従い2段階のランクアップが適用される。従って、最終的な評価ランクはAAAとなる。



小山事業所 1 号館エリア生物多様性プロジェクト
[日立ハイテクサイエンスの森] に対する
JHEP 認証 [第 1 回更新] 審査レポート (概要版)

2020 年 12 月発行

編集 公益財団法人日本生態系協会

発行 公益財団法人日本生態系協会

〒171-0021

東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル

電話 03-5951-0244

URL www.ecosys.or.jp/

* 禁無断転載・複製

© (公財)日本生態系協会 2020

